



□特別寄稿□

波乱に満ちた 日本人女性監督のミシガン映画 「Believe Again」 製作記

2008年よりミシガンに映画産業を誘致し、雇用や観光産業を活性化させようという動きが始まった。ミシガンで映画を撮影

すると製作費の最大42%を補助する政策が取られ、ミシガンでは「グラントリノ」、「8マイル」を始めとし、数々の映画が製作されてきた。

そんな中、日本から渡ってきて、映画業界に足を踏み入れた一人の日本人女性、神原典子(Noriko M Kambara)。見知らぬ土地で、手探りで始めた波乱万丈の映画製作について語る。

■知り合いもいない未知の土地、飛び込んだ映画業界

2009年12月。結婚式の3日後、吹雪の中、デトロイト空港に降り立った。日本ではIT企業(マイクロソフト)で働く一方、パークリー音楽大学で映画音楽の作曲を学び、いくつかの小プロジェクトに楽曲提供していた私は、会社を辞めミシガンに来たのをきっかけに、音楽にフォーカスすることにした。幸いミシガンが映画産業に力を入れ始めた時期。現地で映像向けの楽曲提供の機会を少しでも作れないかと、Film Industry Trainingを受けることにした。右も左もわからぬ土地で知り合いもいなかったが、少しでもつながりや機会が持てればと考えていた。ある時、トレーニング中に私が作った絵コンテを見たプロデューサーが「こいつは何者だ!？」と。何やらただならぬインパクトがあったらしい。それで「うちでインターンしないか?」と声がかかり、映画「グラントリノ」の製作に携わったプロダクションでインターンをすることになった。

■思いがけない、映画監督への道

インターン中は、前職の経験を生かし、新しく立ち上がるプロジェクトのためのWebデザインやシステム構築の手伝いをした。また、今後製作する映画やTV番組の企画用に送られてきたシナリオの評価や、オーディションの手伝い、さらに、なんとミュージックビデオのバックダンサーまでも行った。色々な事をしながらも、何とか楽曲提供のチャンスがないかと窺っていた。

私は日本でシナリオ執筆も学んでいたのだが、ある時「グラントリノ」にかかわったプロデューサーと話していた時に、「いつか自分でシナリオ書いて、イメージを見る形にして、それに音楽つけられたら最高!」と私が言うと、「君がやりたいのは、映画監督だね」と言うではないか。映画監督だなんて考えたことすらなかった。なにしろ映像、照明、音声、音楽、全てについて把握し、クルー(撮影スタッフ)を動かし、俳優たちに指示を出すなんて考えただけで眩暈がする。さらにそのプロデューサーは信じがたい一言を放った。「何か一つ、作ってみろ」と。耳を疑った。なにしろ、アメリカに来て1年弱。聞き取りだっておぼつかないことが多々あるのだ。監督なんて、日本語環境でさえ経験がないのに、英語環境でなんて到底無茶に思えた。

しかし、幼少のころから、心に浮かんだイメージを、音楽でも映像でもストーリーでも何かしらの形で表現し、メッセージを世の中に伝えたいと考えていた私に、「映画監督」という選択肢はピッタリのように思えてきた。無茶だと思い込み、行動をセーブしていたのは自分の思い込みに過ぎない。私はとにかくやってみることにした。

■「苦境にいる人を勇気づけたい」、映画「Believe Again」の原形

とはいっても未経験者に出資者が集まるわけがない。私は超低予算でも撮影可能な「ミシガン」を舞台にした、ごく単純なシナリオを考えることになった。

ある時オフィスを訪ねてきた初老の男性が、プロジェクトマネージャーに相談しているのを小耳にはさんだ。「仕事がなくってね。トレーニングを受けて、映画業界で仕事が得られたらと思うけど、この年齢だし、やっぱりダメだったとなると、ショックだしな…」

結局この男性はチャレンジする前に諦めてしまったようだ。2010年、当時は不況の真っただ中。失業者も多く、未来に希望を見出せずにいる人たちが大勢いた。始める前に諦めてしまうとは、何て勿体ないことだろう。こういう人たちを勇気づけられたら…。

そんな気持ちから生まれたストーリーが、映画「Believe Again」だ。

シナリオは日本にいたとき通ったシナリオセンターの元クラスメイトにレビューをしてもらい、それを自分で英訳した。そのシナリオを、ネイティブスピーカーのライターに英語チェックしてもらい、さらに内容もブラッシュアップし、なんとかシナリオが完成した。

■事態は一転、暗雲立ち込める政治情勢

ところが、時は2010年~2011年冬。政治情勢によりミシガン州が映画の助成を継続するかどうか、怪しくなってきたのである。配役も決まり、州から助成金給付の認可も下りていた、進行中のTV Showの企画さえ暗礁に乗り上げてしまった。当然、私の企画も保留となった。

様々な政治的思惑と、汚職がうずまく中、ハリウッドからミシガンに移住してきていた人たちも、この不安定な政治情勢に不安を感じ、次々とカリフォルニアに戻ってしまった。オフィスのメンバーも一人去り、二人去り…そうして、私のインターン生活は終わりを告げた。

■ゼロからのスタート

さて、これからという時に、こんなことになってしまって、どうしたものか…。全ては白紙になり、もはや私に残るのは、トレーニングで知り合ったわずかな知り合い以外、何も無い。

途方に暮れつつも、自分で進めることにした。まずは、インターン中に経験したTV Show同様にオーディションを開催することにした。果たして応募者が集まるのか不安だったが、インターネットで募集をかけると、あれよあれよという間に、俳優が70名ほど集まった。これはオーディションサイトなど、ミシガンに映画産業のインフラが整い始めていたおかげである。

しかし、進める上で問題となるのが、「言語」の問題である。書類選考はいいとして、面接となると、ネイティブスピーカーでない東洋人というのが一目瞭然である。しかも、日本で多数の映画製作経験があるならまだしも、監督の実績などない初心者。加えて、日本人は年下に見えるため、私など学生にしか見られないことが多い。「こんなアジアの小娘のもとで、やってられるかよ!」と思われ辞退されかねない気がしてきた。

そこで考えた。これまでの経験上、人は、相手が男で年配っぽく見えるだけで、実力はどうあれ、経験豊富で高い地位の人に違いない、と勝手に思いこんで扱いを変える傾向がある、とわかっていて。少なくとも日本では。例えば展示会で、入社数年の私と、20代だけど50代に見える髪の薄い新入社員後輩が説明員として並んでいたところ、ほとんどの訪問者は私を下っ端、髪の薄い新入社員を上司だと思い込み、しきりに新入社員に自社アピールをしていたことがあった。こうしたカラクリを利用しない手はない。

私は、Film Industry Trainingのクラスのメンバー数人に協力してもらい、年配に見えるアメリカ人のクラスメイトにメインの面接官としてふるまってもらう事にした。経験はないものの、見

た目は 60 代位に見える 40 代の白人男性。私を含め 4 人で面接を行う事にした。案の定、面接に来た人たちは、彼のことを、経験豊富なリーダーと思ったようだ。どのタイミングで誰が何をするか、面接に来た俳優に対して何を言ってもらおうか、またどういう観点からそれぞれ評点をつけるかを、事前に打ち合わせておき、その通りに進めてもらった。おかげで、面接は計画通り順調に進み、無事に配役を決定することができたのである。

私が以前 T 業界でやっていた事とは全く違うけれど、プランニングし、人に説明してメンバーに加わってもらい、実行して、進捗管理し…といったようなプロジェクトをマネジメントしていくという点においては、分野は違うけれど根本は同じであり、これまでの経験が大いに役立った。

■逃げ出したい日々

いよいよ撮影の日が近づいてきた。監督をやるとなると、自分が表に立たなければいけない。急に怖くなってきた。ミシガンに来てから、何かこちらがしゃべると「何？この東洋人」という冷ややかな視線を浴びせられることを、スーパーの売り場などで何度も経験していた。西海岸と比べると、東洋人はかなりマイノリティである。不審者を見るような視線をまた浴びせられるのだと思うと胃のあたりが痛くなり何度も逃げ出さなくなった。しかし俳優も集めてしまったし、もはや逃げるに逃げられない。心のどこかで、追い込まれなければやらない自分がいることも知っていた。だからこそ、後戻りできない状況に自分を置いたのかもしれない。

■芽生えてきた、わずかな自信

本編の撮影に入る前に、まずは撮影を 1 日行い、それを元に予告編を作ることにした。これまで、音楽など自分が作った作品を見せると、「東洋人の小娘」と明らかに見下していた相手の態度がガラリと変わるという事を何度も経験していた。だからできるだけ早い段階で目に見える物を見せる必要があると考えたのだ。

撮影当日。次々と集まってきた俳優は、現場を見て皆「え？なにこの小規模さ？」と思ったようだった。そりゃそうであろう。面接時には面接官 4 人もいて、カメラも回して、それなりの規模風だったのに、いざ現場に来たらわずかなクルーに、わずかな機材しかないんだもの。それでも元クラスメイトに協力してもらって、なんとか撮影を終えた。やり終えたという事実が「やればなんとかなる」という自信につながった。俳優の中には「何で私が、こんな小規模のプロジェクトに参加しないといけないんだ！」と明らかに見下した態度だった人たちがいる。しかし、編集をおえた予告編のサンプルを見せると態度が変わった。彼らは超低予算のインディペンデント映画の中にはひどいクオリティのものがあるとよく知っている。元クラスメイトも俳優たちも、つたない英語の東洋人小娘が作るものなんて、ひどいクオリティのものだと思っていたのだろう。まともなものが出来上がってきたのを見て、信頼してくれたようだった。また、他の現場とは違って、私はできるだけ無駄な時間が生じないように入念にスケジューリングして進めて行ったのも、俳優たちにとって好評だった。

こうして少しずつ俳優と信頼関係を築いていったのである。私は最初、「ノンネイティブのガイジン」であることにコンプレックスのようなものを持っていた。しかしきちんと成果を出せば、それを認めてもらえると知り、徐々に差別的思い込みから解放され、自信を持って堂々と発言できるようになっていった。

■異国語の中の思考錯誤

撮影の当初は、俳優が流暢に英語を喋れば、それで OK かのように思えて、3 ~ 4 テ

イクでOKを出していたのだが、次第に英語環境にも慣れ演技に対する目が肥えてきた。そのため撮影期間の後半では、たった 3 秒程度、台詞一言のカットでも、うまくいくまで 60 テイク以上やり直したのもある。俳優たちもよく付き合ってくれてくれたものだ、とつくづく思う。演技面だけでなく、撮影技術、その他あらゆる面に関して、思考錯誤を繰り返してやっているうちに、スキルアップできていった部分があるため、初期に撮ったものと最後の方で撮ったものでは、クオリティにかなり差のあるものとなってしまった。いきなり無謀にも長編から始めてしまったわけだが、短編から始めてスキルアッププロセスを踏むべきだった。後の祭りであるが。

■金もない、コネもない、人手不足の殺人的な撮影現場

初回の撮影は元クラスメイトのおかげで何とか乗り切ることができたが、彼らも別の仕事等で、継続的にクルーとして協力することはできなかった。自分の故郷なら知り合いも多く、学生時代の仲間に声をかける、といった事もできるだろうが、それもできない。他にクルーを雇えるような資金などあるわけもなく、ボランティアクルーをネットで探すことにした。応募してくれたのは、たった 3 名。アメリカ人学生に日本人 2 人。全ての撮影に来られるわけではなかったが、とにかく少しでも、参加してくれる人がいるのは本当にありがたかった。基本的に多くの場面は家の中で、地下室をグリーンスクリーンルームにして撮影していたため、機材の移動が少なく、少人数でも何とかあったのだが、大変なのが外での撮影。どんなに小規模でも、照明、音声、カメラ等、最低でも 3 人は必要だ。しかし、外での撮影の日に限ってクルーが一人も来られなかった時は悪夢だった。一人で機材を運び、片手でマイク、片手でレフ板を支え、俳優に衣装替えから立ち位置、演技まで指示を出しながら、複数のカメラを回すというあり得ない状況で撮影し、当然ながら雑音や光の問題を沢山含んだものになってしまったこともあった。

■あきらめず、未来を信じる事

こうした撮影は体力的にも精神的にも非常にきつく、何度も、もう辞めたいと思ったこともあった。さらに撮影した膨大な量のデータを編集していく過程では、素材の加工や背景の合成も行うため、たった数秒の場面を作るのに数週間かかることもある。永遠に続く先の見えないトンネルの中をさまよっているような気にさえなった。正直、何度も諦めかけた。しかしその度に、仲間達に励まされた。「Remember! you should “believe again”」と。そうだった。諦めたらそれで終わり、未来を信じよう。それこそ自分が伝えようとしたメッセージだったじゃないか！と逆に気付かされた。温かい人々に何度も救われ、何とか作品を完成させることができたのである。

その後、毎日のように俳優から劇場公開に向けたブッシュもあって、Royal Oak の Main Art Theaterでの劇場公開を果たすことができた。また、ハリウッドの映画祭、International Family Film Festival でも正式に選ばれ、現在はDVDとして発売されている。

たとえゼロからでも どんな状況でも 実現しようと決心し
未来を信じて行動に移した時 新しい未来は開ける。

強いパッションを持った、ミシガンの温かい人達の思いが形となった映画「Believe Again」。宜しければ是非、見てみて頂きたい。

映画 Believe Again 作品情報 <http://www.pinemotion.com/believe-again/jp/> (日本語)

そして 貴方の夢を 実現したい未来を目指して 突き進んでいただければと思う。(NK)